2021年度学内研究助成 成果報告書

① 報告者所属・氏名

生活科学部現代生活学科・須賀由紀子

② 事業名

大学生による地域価値共有手法の開発 Ver.2
～ハイブリッド型まちあるきプログラムの構築～

③ 事業の目的

異なる世代・多様な属性の人々が一緒に歩きながら地域を見つめ、地域の良さを再発見し、地域づくりの主体となっていく。それが、SDGs11「住み続けられるまちづくり」の基盤となる。こうしたねらいに基づく地域の価値共有のまちあるきの方法と ICT 活用アプリを開発して効果検証を行い、実装化可能なプログラムのモデル化を行うことを目的とした。

④ 事業実績・研究成果（具体的に）

＜事業実績＞

2021 年度も新型コロナ感染症の影響が続いた。「ひのミラ」（持続可能な日野の未来を考える）高校生との共同プログラム実施も想定していたが、度重なる緊急事態宣言やまん延防止等重点措置などによる活動自粛が長引き、高校生とは活動ができなかった。また、まちあるきの実施計画も難航したが、2021 年 11 月までの基礎的な取り組み、実践女子大学と江戸川大学の合同ゼミ、2021 年 12 月の現地調査を経て、2022 年 2 月にまちあるきプログラムを２コース設計し、日野市の協力を得て実践し、実施成果をまとめた。

【実践プログラム１】「水と暮らし」コース　2022 年 2 月 5 日（土）13：00～16：30

「オンラインまちあるき」を併用した「ハイブリッド型まちあるき」を行った。日野市中央公民館と連携して、現地のまちあるきの様子を Zoom で中継し、「オンライン組」はそれを見ながら、一緒に「オンラインでまちあるき」を行った。コロナ感染症急拡大の中、現地組は少人数で行った。まちあるき後、地域価値共有のワークショップを行った。

【実践プログラム２】「煉瓦と歴史」コース　2022 年 2 月 26 日（土）13：30～16：00

「日野のまちの魅力（歴史や文化風土）」を探索しながら、まちに興味を持ち、これからのまちづくりに意識を向ける気づきの機会とすることを目的に、第二回目のプログラム設計を行った。前回同様、まちあるきの後、共有の時間を設けた。

「オンラインまちあるき」併用のハイブリッド型で行った。オンライン参加の方との双方向参加型、ポイント解説の場面ではクイズ形式なども取り入れて、オンラインの方も一緒にまちあるきに参加できる工夫を増強した。また、ガイドなしでもグループや単独でもまちあるきをすることができるようにするための ICT アプリ活用プログラムを試行した。

＜研究成果＞

①　「ハイブリッド型まちあるき」の可能性

リアルなまちあるきとオンラインまちあるきを併用する「ハイブリッド型まちあるき」の可能性を確かめることができた。オンラインに使用した機材は、i-Pad とモバイル Wi-Fi、スマートフォンとマイクである。つまり、日常的にあるツールで、大学生を起点とするハイブリッド型まちあるきが無理なくできることがわかった。プログラムの成否に大切なことは、その土地の魅力の本質をどうとらえるか、どう伝えたいのかというテーマ性であり、技術的なバリアはそれほどないといえる。

② 「地域探索型まちあるき」オリジナルプログラムとしての評価

「多世代でのまちあるき＋振り返りワークショップ」というプログラムを行った。まちあるき自体、多世代が自然に交流できて楽しいものであり、地域に触れることで、印象も高まり、記憶に残る。それをさらに、言語化して、世代間の思いを共有していくことで、地域の思いをつなぐ「プラットフォーム」ができていく。結果的に、支え合いの地域社会が生まれ、地域の自立がはかられていく。このような自立型地域社会モデルを構築することができた。

③参加者の「地域愛着」意識にみる、まちあるきプログラムの作り方

先行研究に基づき、地域愛着(選好)・ 地域愛着(感情)・ 地域愛着(持続願望)の 3 つの尺度を採用して、「地域愛着」への効果測定を行った。ある地域に対しての関与の入り口として、「好きだ」という印象（〈地域選好〉感情）を持つことがまず必要であるが、オンラインまちあるきでも、この点に関しては高いスコアが得られている。また、オンライン参加者（必ずしもこの土地に明るいわけではない人々）も〈地域持続願望〉に共感しているところから、地域文脈と重ね合わせるまちあるきのプログラム内容は、見知らぬ土地への関与度を深めることが示唆された。

⑤ 研究成果の発表・活用（学会発表・論文掲載・地域連携・産学連携など）

須賀由紀子・土屋薫（2021）地域の価値発見としての「探索型まちあるき」マップの検討、地域活性学会第 13 回大会論文集、

土屋薫・須賀由紀子（2022）、ライフイベントを軸とした共感の創造に関する考察――地域価値共有型まちあるきプログラムの開発に向けて、江戸川大学紀要 32

大学生による地域の価値共有プログラムの開発～地域と関わる「関係人口」の創出手法として～　江戸川大学・実践女子大学　大学間連携事業報告書　2022

地域連携：日野市企画経営部、日野市中央公民館、都立日野台高校

⑥ 今後の展開・継続性について

今後の課題としては、このプログラムを、他の地域、他の対象でも行うことによって、同様の成果が表れるか、どのようなプログラムであれば運営しやすく成果も得られやすいのかの研究をすすめ、地域愛着まちあるきプログラムの標準化を図ることである。また、まちあるきのテーマやルート、解説資料、まちの人の声などを、スマートフォンの位置情報に応じて表示できるよう web-AR に搭載することで、仲間で交流しながら地域の魅力を発見し、再編集していく地域学習ツールともなる。このような問題意識のもと、2022 年度も地域連

携・高大連携の取り組みを継続し、web-AR を媒介としたポートフォリオ形式の地域学習システムを構築することを構想している。